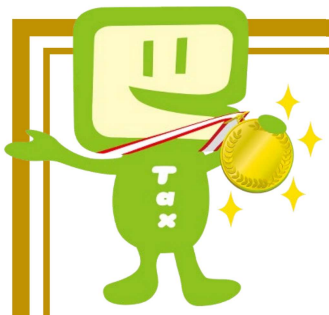


大阪国税局長賞

限られた予算、その先にある暮らし

光泉カトリック高等学校　２年　市川　翔健

「またクレームの電話だった」。市役所の道路河川課で働く父が、夕食の席でそうこぼすのを、私は何度も聞いてきた。父の仕事は、住民から寄せられる「近所の道路が陥没している」「側溝が壊れている」といった要望に対応し限られた予算の中で補修の優先順位を決めることだ。ある夜、父は珍しく、声を荒げた住民の話をした。「今すぐ直せと言われても、今年度の予算はもう別の道路に割り当てた後なんだ」。私は思わず、「じゃあ、予算を増やせばいいのに」と口にした。父は少し困ったように笑い、「その予算は、そもそもどこから来ると思う」と聞き返した。

中学三年の職場体験で、父の課を一日だけ見学したことがある。窓口には、道路のひび割れを写真に撮って持ってきた高齢の女性が座っていた。父は地図を広げ、「今年度中に着工できる区間」と「順番待ちで来年度以降になる区間」を、頭を下げながら丁寧に説明していた。女性は納得しきれない表情のまま、それでも小さくうなずいて帰っていった。あの窓口でのやり取りを思い出しながら、私は父の問いを、改めてかみしめた。

言われて初めて気づいた。父が扱う「予算」とは、住民が納めた税金そのものだった。つまり父は、限られた税収という一つのパイを、無数にある「直してほしい場所」へ切り分ける役目を担っている。誰か一つの道路を優先すれば、別の道路は後回しにせざるを得ない。父の困った表情の裏にも、あの窓口の女性の納得しきれない表情の裏にも、「もっと応えたいのに応えきれない」という限られた税という一点に行き着く葛藤があったと分かった。

興味を持って調べてみると、日本の道路や橋、上下水道の多くは高度経済成長期に整備され、今まさに一斉に更新の時期を迎えているという。しかし人口は減り、働く世代も減っていく中で、それを支える税収はこれから先細りしていく見通しだ。父が住民に頭を下げながら順番を説明していたのは、一人の力ではどうにもならない、国全体が抱える構造的な問題の最前線だったのだ。

それまで私は、行政の対応が遅いと聞けば、単純に「仕事が遅いだけだ」と思っていた。しかし本当は、怠けているのではなく、限られた税金を公平に配分しようとした結果、誰かを待たせているだけなのかもしれない。来年、私は十八才になり、税を納め、その使い道を選ぶ側に加わる。父が毎晩、家に持ち帰ってくる「順番を決める重さ」は、私たち一人一人が納めた税金の総量そのものであり、その重さを軽くも重くもするのは、有権者としての私たちの選択なのだ。

今度、父が疲れた顔で帰ってきたら、私はもう「早く直して」とは言わないだろう。代わりに、限られた税をどう配分するかを一緒に考え、必要なときには自分の意見として声を上げていきたい。それが、税という仕組みの中で生きる一人として、これから私が引き受けていきたい役割なのである。